令和６年度 第１ 回 沖縄県 SDGs アドバイザリーボード会議 議事概要

〇日 時：2024 年 12 月 22 日（日）10:00-12:00
〇場 所：沖縄県市町村自治会館　４階第７会議室
〇出席者：
（委員）玉城座長、蟹江委員、北村委員、佐野委員、島袋委員、平本委員、渕辺委員、和田委員
（沖縄県）小川政策調整監、武村統括監、新垣室長、川武主幹、金城主任

＜以下、議事概要＞

（事務局）
本日は、大変お忙しい中、ご参加いただき、ありがとうございます。
定刻となりましたので、「令和 6 年度 第 1 回 SDGs アドバイザリーボード会議」を開催させていただきます。
本日の司会は、沖縄県企画部　企画調整課　SDGs 推進室　新垣が務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。
はじめに、配布資料の確認をいたします。本日の配布資料は、(資料１)令和 6 年度 SDGs アドバイザリーボード会議資料、(参考資料)令和 6 年度 SDGs に関する市町村アンケート結果となっております。
本日は北村委員、渕辺委員、和田委員はオンラインでのご出席となっております。
北村委員の方がまだオンライン参加していませんが、全員８名の委員の出席を予定しております。よろしくお願いいたします。初めに、今日はオンラインの方もいますので、発言の時はマイクを使わせていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。
始めに、小川政策調整より挨拶をお願いします。

（政策調整官）
皆様、はじめまして、沖縄県政策調整監　小川　和美です。
委員の皆様には、年末のご多用の中、本会議に御出席いただき、ありがとうございます。
昨日の「SDGs 全国フォーラム 2024 沖縄」では、蟹江委員に 2024 年９月の国連未来サミットの内容を踏まえた基調講演をいただくとともに、玉城座長にもファシリテーターでご登壇をいただきました。平和やパートナーシップの視点、今後の SDGs の方向性などのパネルディスカッションを通じて、SDGs の今後の取組や具体的な行動に繋がる機会となったことと存じます。
和田委員からは、高校生のワークショップにおいて、慶応義塾大学の学生とともに講師を務めていただき、本フォーラムでの次世代のメッセージ発表に繋がる幅広い視点での SDGs の取組の紹介をいただきました。
平本委員からは、「SDGs ユース沖縄会議 2024「遊びながら、未来を語る」」のサイドイベントを

開催していただき、SDGs のゲーム体験や若者同士の交流を通じて、SDGs を身近に感じるきっかけとなったことと存じます。

北村委員、佐野委員、島袋委員、渕辺委員からも本フォーラム開催に様々なご意見、ご助言をいただきました。

本フォーラムの開催に委員の皆様から様々なお力添えをいただき、心から感謝申し上げます。本フォーラムを通して、県外や国内外に向け「沖縄らしい SDGs」の取組を発信するとともに、多様な主体の参画と取組の創出の促進、次世代に繋がる持続可能な社会の実現を図っていきたいと考えております。

本日の議題となっております「モニタリングにおけるサマリーの方向性」についても、委員の皆様には、是非、忌憚のないご意見、ご助言をいただきますようお願い申し上げます。

ゆたさるぐとぅ　うにげーさびら。いっぺー　にふぇーでーびる。ありがとうございました。

（事務局）

ありがとうございました。小川政策調整官は用務の都合により退席させていただきます。小川政策調整官ありがとうございました。

（政策調整官）

どうぞよろしくお願いいたします。

（室長）

それでは議事進行を玉城座長にお願いしたいと思います。玉城座長よろしくお願いいたします。

（玉城座長）

みなさんおはようございます。昨日は大変お疲れ様でした。皆様及び事務局のみなさま大変ご苦労なされて私は盛会に終わったかなと思いますけど皆様いかがでしたでしょうか。

今日の進行はサマリーについて皆様からご意見いただきたいということもあるんですけど、せっかく昨日の今日ということもありまして、全国フォーラム無事終えましたけど、どのようにみなさま感じたのかというところと、みなさまから貴重なご意見いただきましたので、武村統括監ふくめ、改めて議論しなおしてみなさまの意見をできるだけ反映させた形になったのではないかと思っています。

オープニングで南風原高校の文化芸能コースの方々に出てもらいました。彼らは去年 30 周年を迎えた学校のコースなんですけれども、去年１年間を通じて、自分たちの文化芸能部がいかに持続可能な仕組みづくりに、沖縄らしい SDGs に寄与しているのかということを調査し、口承文化という沖縄のいわゆるウタとか、語りというものをどういう風にアーカイブしていくかデジタルがいいのか、やはり方言として残していく方がいいのかといろいろ模索しながら進めていました。

昨日の舞いもこれに合わせて自分たちなりに創作意欲を高めまして、全国フォーラムにふさわしい舞いという形で昨日の形になっています。なので舞台ごとに彼らは表現形式を変えていくという

大変すばらしい形ですし、あと衣装に関しましても南風原という地区が南部の激戦区であるという地域の中で、南風原絣という貴重なものを復興させながら単純に、着物を復興させるだけじゃなくて芸能と一体化して文化復興、振興していく中でさらにこの舞いにもつながっていく、衣装も地域一体の、みんなの応援で成り立っているものです。なかなかこういったものまで解説はできなったんですけど、そういったものは本当に沖縄らしいSDGs、文化芸能の宝だなと思っています。

第１セッションにつきましては、蟹江先生の基調講演そしてパネルディスカッション第１、第２と本当に沖縄らしい、そして北村委員に端を発します、この社会の中でこれだけ紛争についてみんなが心を痛めている中でこれは無視できないんじゃないか、これは沖縄だからこそできるんじゃないかというご意見をうけまして、あとJICAさんの協力も得まして昨日のような形になっています。

沖縄の観光と開発これは切っても切れない産業ですので、それもハワイの貴重なご意見をいただきながら昨日の形を迎えています。そして平本委員、蟹江委員、和田委員の皆様のご協力をもって高校生のプログラムがああいった形で、あと他にもいろいろプログラムあったんですけど、昨日はあの形で高校生の発表になっています。

そして沖縄キリスト教学院大学、しまくとぅばを入れた方がいいではないかというところで、世界人権宣言の全文はすごく難しくて、全文ではなくて１条から30条までをしっかりと半期の授業を使って、しまくとぅばの専門家そして話者の方を入れながらしっかりと作り上げてきたものを、群読という単に朗読ではなく群読という表現方法を昨日のような形で、歌と追いかけっこしていく群読というと言うんですけど、それをまたプロの講師を招いて昨日のような舞台の形となっています。

盛りだくさんで私の中では沖縄らしいSDGsがたっぷりと詰まった一日だったかなと思います。各委員の活動が表に出ることはなかったんですけど、皆様のご意見を受けて昨日のような形になっています。

昨日の今日ですので、いろんなことを感じてらして、いい点ともしかしたらやっぱりもう少しこうしたらよかったね、という点を含めまして今後もまたSDGsのイベントですとか、沖縄県のいろんな様々な催し物にも通じることかなというふうに思いますので、よろしければ皆様の意見交換の時間を今日取らせてもらって、事務局の方にまぁ私も含めてですけど吸収していきたいなというふうに思っていますので、どなたからでも構いませんので、昨日の良かった点とここもう少しこうし他方がいいかなという点を意見をいただきたいなとおもいますので、よろしくお願いいたします。

（島袋委員）

宮古島の会議の時にかなり会議して、かなり無理をお願いして沖縄らしいSDGsのセッションにするべきだということでいろいろと議論で意見を出させていただきました。それで今回の感動したのは、こうした我々のいろいろな願いとか希望とかきちんと事務局がまとめてそれからファシリテーター、パネルディスカッションを作ってくれて、それと玉城さんのご尽力もあったかと思うんですけど、本当に沖縄らしいSDGs、特に、とても重要だと思ったのは、平和ということを基盤にするこの平和の価値を共有するということは非常に重要なことで、SDGsは人間の安全保障を達成するた

めの方法なんですよね、だからそれを前面に打ち出せたことは全国にアピールする機会として非常に良かったんではないかと思いました。

それともう１点として、フォーラムではポストSDGsの話もありましたが、その中で今後主要な議題になってくるんじゃないかと思っているのは、現在のSDGsは文化の面がとても弱いという点です。目標11の持続可能な都市で、文化の継承というのは一応あるんですけど、世界遺産の保全とかそれぐらいのレベルで、文化の面が非常に弱いというのは今のSDGsの大きな特徴なんですよね。

私はこの部分を今回のSDGsのセッションとか、大学生の宣言を見て、高校生の活動を見てですね、これは今のSDGsを超えるまさしくビヨンドSDGsと言ってもいい方へ向かっているんじゃないかなということですね、沖縄の文化の継承、単に文化の継承だけではなくて、沖縄の文化を土台・基盤とする新しい文化の創造まで見えてきたのかなという感じがしました。

特に最後の大学生の群読、歌を歌っているような宣言で、非常に驚いたのは、実はあの中に耳が聞こえない方がいるらしいんですよ。それでも歌っていると、誰一人取り残されずに普通のようにまさしく歌っている。障害を持つ方でも、ああいった声を出す場に一緒になって声を出せるということで、それで非常に感心・感動したし、それとSDGsが持つこういった誰でも平等な機会があるんですが、文化を舞台として教育とか平和とかそれの巻き込んでいく新しい形が提示できているんじゃないかということで、感動して昨日は見ていました。

悪いところは今のところ全然思い浮かばないので、こういう課題があるとか後から思いつくかとおもいますけど、感動したことを素直に言わせていただきました。どうもありがとうございました。

（平本委員）

今、島袋先生からもあったとおり、大変すばらしい会だったなと思っています。私は県外の者なので、対馬丸記念館の平良さんの話はすごく感動しまして、ああいうところをすごく大事になさっているという沖縄の根柢の思いがすごく見えて、そこからＪＩＣＡさんの取組として、実際に他国において例えば博物館を作るといったときに協力できるところにちゃんと繋がっていくんだというところが流れとしてよかったなと思っています。まさにSDGsを平和の観点でそういうふうに世界に広げていくのか、という沖縄らしい取組の一例を最初の方にご紹介いただいたので、そのあともすごく理解しやすかったなと思っております。

前々日にはサイドイベントを若者たちと一緒に企画をさせていただいたんですけれども、そこもすごくリンクをしていたなと私は思っております。石川と東京と沖縄の若者が一緒になって検討するとイベントでしたが、沖縄の中高生もいろいろとご意見の中で、やっぱり沖縄らしい考え方がけっこう前面に出ていたという特徴があったと思っております。

島袋先生が先ほどご指摘されたとおり従来のSDGsは文化の点がすごく弱いということですが、Pact For The Futureではしっかりと文化いう文言が入っています。そのため、若者の議論の中でも文化というのを大事にしたいという意見が出ました。具体的には、実際に部活のACT部で県外からの修学旅行生に自分たちが、若者が案内するという活動をしている子たちから、ぜひそういった

自分達の活動を生かして持続可能な社会を作る取組を立ち上げていきたい、という提案がありました。あとはやっぱり平和に関する意見が多くあり、なんでみんなが平和を望んでいるのに平和にならないのかという非常に純粋な疑問から、自分たちができることは何なのか、という議論が出ていました。

あとは食品ロスや気候変動という身近な話に関して、気候変動はまさに台風が予測と違う動きをして大変だったという体験談があり、それに基づき自然との距離感という観点から提案がありました。このように、全然意図していませんでしたが昨日の本イベントと、その前に行われたサイドイベントの若者の議論というのがすごくかみ合っているところが興味深いなと思いました。

おそらく根本的なところをしっかり捉えているので、別に示し合わせをしなくても連なっていたんじゃないかなと思いまして、そういう意味でいうと、こういった取り組みに継続的に若者に参加をしていただくことによって、何か皆が一丸となって同じ方向を目指すことができるんじゃないかなという希望をすごく感じました。以上でございます。

（玉城座長）

平本委員ありがとうございます。今回、平本委員、和田委員の、若者参加を単なるウォッシュにならないようにという言葉が常に私たちの根柢にありまして、決めていく際にも本当に何をもって参加かというのは議論させて昨日の形になったかなというふうに思いました。ありがとうございました。

それでは皆様、他にいかがでしょうか。オンラインの先生方もよろしければ、コメントいただけると嬉しいです。では佐野委員の方よろしくお願いします。

（佐野委員）

今、島袋委員や平本委員からお話しされたことと重ならないよう、私からはこうしたらもっとよかったのでは、という点だけ申し上げようと思います。

例えばチラシです。芸能とか、若者、次世代からのメッセージということにすごく力を入れていたのですが、それがチラシでは一行になってしまっているんですね。

次世代からのメッセージは、実は 40 分とって行われる予定だったのが、実際には短く終わってしまいました。会場では発表者の後ろで、今までやってきたワークショップなどの映像を流しながら報告されていたのですが、いろいろな議論をしてきて今日のメッセージにつながったということであれば、後ろで流すのではなく、もう少しその部分を紹介してもよかったのではないかと思いました。

平本委員がおっしゃった通り、セッション１とセッション２で話していること、言ってみれば大人が話していることと、若者たちが話してきていることが一致している、ちゃんと繋がっていく、というところも駆け足になってしまい、力を入れてやってきたところが、なかなか事前の案内では見えにくかったかなと思いました。

郷土芸能も、単なるセレモニーではなくて、十分な意味を持たせていましたし、先ほど玉城座長から話があったような、ストーリーというか、背景のところも記載があると、もっとみんなが見た

くなると思います。
　なので、発信の仕方というのも工夫できたら、もっとみんながオンライン参加もできたかなと思います。今回、準備の部分が非常に短く、皆さんに本当に駆け足にさせてしまったと思うのですが、もし今後、同じようなこと、全国フォーラムでなくても何かあれば、その辺りもじっくり議論できるようになっていけるとよいと思いました。
　中身自体がすごくよかったので、発信をもうひと工夫すると、さらに皆さんを巻き込めるのかなと思いました。本当にお疲れ様でした。

（玉城座長）
　はい、ありがとうございます。こちらの方はぜひ吸収していただけると嬉しいです。
　それでは他にいかがでしょうか。蟹江委員お願いします。

（蟹江委員）
　本当に昨日はお疲れ様でした。県の方々、大変、素晴らしいオーガナイズをしていただいて、プログラムも完璧だったと思いますし、実際のところ、日曜日もこのような会を開いていただいて本当にありがとうございます。
　私は第１回から関わり続けていて、去年は参加できなかったんですけれども、正直な気持ちとして本当に一番素晴らしい会だったという、強い意志を持ちました。何がよかったのかというとやっぱり若者の声がいっぱい出てきていたということと、その文化とか、伝統とか、もともとあるものを SDGs によって再び見直そうという、これは世界的な潮流だと思うんですけれども、それがダイレクトに出ていたので、その点が本当にすばらしいなというふうに思いました。
　特にですね、一番最初のパフォーマンスから始まったというところが、非常に強い印象を残しましたし、しかもそれが高校生というところで、本当にまさに全国フォーラムと言うにふさわしい会合になったというように思いました。
　あとやっぱり、やって終わりではなくてやっぱり勢いというか、気持ちというのはやっぱり繋げていただきたいなというふうに思いましたし、特にあれですねセッション２で仰っていましたけれども、ミツエさんが来年、ハワイと沖縄でつながりを、ということを仰ってましたけれども、私も今年はハワイのいろいろな活動に携わる機会が、たくさんあってですね、まさに同じ方向を目指しているなということを感じまして、やっぱり、もともとあるものを、人間の活動によって、ごちゃごちゃしてきちゃっているんだけれども、もう一度そこを見直して、でもまだできてないところがあって、例えばジェンダー平等なんかもそういう１つの例ですけれども、そういうところを修正しながら、古いものをさらに発展させていきましょうというですね、本当に同じ方向を見ていると思いますし、そういう意味では昨日の私の話の中でも、デニーさんにはですね横に座りながら、ローカル 2030 アイランドネットワークにぜひ入っていただくと良いではないか、というお話をさせていただいたんですけれども、そういった、世界に入ってそこをリードしていただくっていうことが、ふさわしいということを昨日のフォーラムで確信しました。
　やっぱり高校生も、場を与えると多分もっともっと成長すると思いますので、ぜひいろんなとこ

ろに引っ張り出していっていただいて、そういった本当に持続可能性を考える、自分たちでリーダーになれるんだっていうことをですね、感じてもらって、成長を促していくっていうことがすごく大事なんじゃないかなというふうに感じました。以上です。

（玉城座長）
ありがとうございます。それでは和田委員、お願いします。

（和田委員）
はい。ありがとうございます。
まず最初に、本当は伺う予定だったんですけども、体調崩してしまいまして、オンライン参加となってしまい申し訳ございません。昨日はオンラインで拝見させていただきました。
２点あるんですけども、まず１点目感想のところとして、私自身、実際に高校生のセッションに関わらせていただいて、秋の第１回目のワークショップにお話をさせていただきました。
そうしたときに、SDGs という言葉は知ってるけど、でも SDGs って全然達成できてなくて、なんで達成できていないんだろう、達成できないんだろうともやもやしている中で、インプットさせていただくなかで、じゃあどうやったらいいんだろうといったところを、すごくもがいている様子をその時に拝見させていただきました。
でも昨日を見ていると発表の場ではやっぱり自分たちでできることで何をやんなきゃいけないんだとか、自分たちが将来になったときにどういう責任を果たすのか、それを自分たちがもうやるべきところ、みたいなとこまで解像度高く押し込めていって、力強い宣言があってとても良かったかなと思っております。
こうやってアウトプットする場でそのまま届けるところに意義をすごく感じましたので、これは、設計してくださった皆様には、すごく感謝しております。
もう２点目に関しましては、ちょっと現場に行けなかったのでお伺いしたいんですけども、実際にはどれぐらいの方がどういう属性の方がいらしたのかなというのを後ほどでもあれば共有いただければと思っておりまして、今回のみなさまのお話のように、いい内容だったのですけど、これが実際どんな人に届いたのかなというのが結構重要だなと思っておりまして、その人によってどう社会が変わっていくかっていうこともあると思いますので、そこも振り返りつつ、今後の糧となればいいなと思っております。以上です。

（玉城座長）
はい、ありがとうございます。ほかに委員としてご意見ある方いらっしゃいますか。
まだお時間あるので言い足りなかったこと等ありますか。
私の方からもう少しお話をさせていただきたいと思っています。皆さん本当にお疲れ様でした。
特に蟹江先生は本当に大役ありがとうございました。島袋委員もおっしゃったとおり県外の方が平和について語られることに非常に意義があるなと昨日は思いました。いくら沖縄の人間が言ったとしても伝わらない部分が、県外の方、そして SDGs に関わる方が軍事の問題、環境、戦争、そし

て人間の安全保障もろもろを含めて蟹江先生のわかりやすいお話は私たちの心にも沁みましたし、おそらくそこをもって全国にも響いたのではないかと思っています。

そして戦後、来年 80 年ですけれども、今、沖縄の中では非常に機運が高まる中で、そこと観光を含めて、広島、沖縄、長崎ともしかしたら協力関係を結べるんではないかなと、コンベンションビューローの下地会長が昨日登壇されてましたけれども、平和と観光は本来ならば一緒に考えてもいいはずのものなんですけれども、なかなか一緒にする場面っていうのがこれまでなかったなと。考えてみれば非常に不思議なことなんですけれども、実は考えてる根幹が一緒で、皆様ご自身も刺激を受けたのではないかと思いますし、何か今回のものを生かしていく意味でも、おそらくこの会議の中で例えばリソースパーソンを呼んでそこをまた一緒に議論したりということも今後可能性としてはあるのではないかと思いました。

合わせて第１セッションと第２セッションですけれども、細かいことを少し言いますと、時間が第１セッション、第 2 セッションで違ったなというのが個人的に、私もしっかり第１と第２を見てなかったので思ったんですけども、第１の方が登壇者も多かったですし、もう少し時間があってもよかったなと思ったのと、第１と第２で時間が違うというのもあったので、そこはちょっと数字をきっちりと 90 分なら 90 分というふうに時間を合わせてよかったんじゃないかなと個人的には思いました。

併せて、先ほど佐野委員の発言にありましたように、事前のチラシになかなか表現できなかった、これはもう本当に事務局の皆様が非常にご苦労されて、今回作ってくださったと思ってるんですね。

チラシには間に合わなかったんだけれども、当日のパンフレットとしてしっかりとストーリー、さきほど皆さんおっしゃったように、南風原高校のストーリーに関しては非常に、彼らの活動というのが素晴らしいものでした。

本当に表舞台に出させていくことが大事だよね、という意味でのこういう記録としてしっかりと残していくという場面があって然るべきだなと思ったので、当日のチラシには間に合わなくても、このパンフレット等でしっかりと作っていく、特にまた高校生に関しても非常にプロセスが大事だったかなというふうに思いますので、そういったプロセスも何かアーカイブできて、例えば間に合わなかったとしても例えばＱＲコードを読み込んで、ご自由に見ていただけるようなものがあると非常にまた、こどもたちの、次にも繋がっていくんじゃないかなと思います。

ポスト SDGs であったりとか、ビヨンド SDGs ということで、今後この先私たちが何ができるのかというときに、新しいものを一から考えなおすのではなくて、積み上げてきたものが沖縄のなかでここを万国津梁会議からアドバイザリーボードまで、５年ですけど、５年のなかである種の道が見えてきたんでなはないかなとすごく思います。それはお一人お一人の委員が県外から関わってくださって、世界と日本と沖縄と結ぶこの SDGs という、私たちがこの場で議論し合ってきた結果であろうなというふうに思います。

で、去年こども家庭庁ができまして、今沖縄県全庁的にこども真ん中政策というのが非常に入り始めていて、とてもいい傾向だなというふうにおもっています。

SDGs とこども真ん中というのを縦軸に一緒に全庁的にやっていくことが、実は SDGs の達成にと

っても非常に重要じゃないかなと思っていて、こども会議に私も有識者として参加させてもらっているんですけれども、そこでも同じように実はこの SDGs 的な議論をずっとされていて、沖縄古来の課題をみんなで議論しあって、それをどう持続可能な未来に私達が渡していけるのかということを活発に議論しているので、より若者の参加が叶っていいんじゃないかなと思いましたので、全国フォーラムは一旦ここで終わりですけれども、なにかここから出てきたエッセンスをなんか繋げていけるような、そういったものをまた皆様からご意見いただきながら、ぜひ県庁には何らかの形で続けていただけたらと思っております。
他に、よろしいでしょうか。

（佐野委員）
ツアリズム、観光に関するフォーラムが沖縄であった時は、観光客も念頭に置きながらのフォーラムだったのではないかと思います。先ほど和田委員からもあったとおり、これが誰に届いているのか、誰が見てくれるのか、関心を持ってくれるのかというところで考えると、「SDGs 全国フォーラム」というと、そのタイトルだけではなかなか見に行こうとは思わない。でも、今回は観光の話もしているので、観光の一環というか、観光客も見られるような何か仕掛けがあったら、面白かったのかなと思いました。
（ビデオメッセージの中で）大阪府知事が「(次回の SDGs 全国フォーラムは）万博の中でやります」と言われて、それならきっとみんな来るだろうなと思いました。沖縄も観光客も多いですし、例えば、修学旅行の一環にするとか、それにはやはり準備の期間が必要だと思いますが、全国フォーラムを行政がやるかっちりしたものということだけではなく、みんなが巻き込まれるようなものにしていく。沖縄の今回の経験を、この次の自治体にもつなげていくことで、もっとみんなが巻き込まれるような形になっていくのではないかと思いました。

（玉城座長）
はい、とても重要なご指摘だと思います。
すみません、和田委員からおひとつ質問が来ていたかなというふうに思います。昨日私たちも第１セッションの打ち合わせの場面では登録者数がどのぐらいで、どういうプロファイル、背景の方々が参加してますかということを少し事務局の方に、代理店の方にはお話をいただいていたんですけど、いまもし分かる範囲で構わないかなというふうに思うんですけど、今共有できたりしますでしょうか。

（事務局）
現在の大体の正式な数字ではないんですけれども、実際会場には約 200 名の方がいらしておりまして、午前中だったり、午後だったりで状況は変わっていたと思いますけれども、オンラインでは 160 名の方が参加しておりました。
で、大体年齢層は 10 代から 70 代、ぐらいの方が幅広くいらっしゃったと思っております。

（平本委員）
先ほど佐野委員がおっしゃったようにうまく次につなげていくところはやっぱりしっかりと、できるといいかなと思っています。皆様から出てきた意見として、まさに全国フォーラムの中で、こういった沖縄としての成果物があり、それを次に繋いでいくところはぜひ沖縄の方から言っていただいて、ぜひ蟹江先生にも後押ししていただきながら、全国フォーラムはどんどん回を重ねるごとに発展していくという形になると、フォーラムとしての意義もすごく大きくなっていくんじゃないかなと思います。
サイドイベントは、今回は準備の時間もなかったので、キックオフという形で、実施させていただきましたが、委員の皆様から意見もありました、Pact For The Future を、もうちょっとわかりやすい要約を作り、それをしまくとぅばで表現する活動も、これから進めていこうと思っています。そして、サイドイベントで若者が主体的に動いていくことが沖縄から始まり、次の全国フォーラムや、その延長上で、実際にそのポスト SDGs を作っていくところに若者が参加するという流れまで繋がっていくと、非常に今回の意義も、大きくなるんじゃないかなと思ってます。そのためにはぶつ切りにならないように、大阪との連携をしながら繋いでいくためのバトンを渡すことがすごく大事になるかなと思っています。ぜひそういったところで、皆さんの力をお借りしながらですね、計画的に活動できればと思っています。

（玉城座長）
事務局から振り返って、こういうふうに思いましたということをご意見でいいので、なにかあったりしますでしょうか。

（事務局）
準備は結構期間が、ギュッとした感じで、慌てながらやったんですけれども、本当に昨日の内容を見て、自分たちも勉強になりましたし、いろんな要素が集まっていて、またこの高校生の意見なども聞いて、本当に頑張ってよかったなあと感じました。

（武村統括監）
今回のフォーラムの開催に当たりましては、本当にたくさんの、ご意見をですね、このアドバイザリーボードの委員の皆さんからいただいて、それを取り入れたことで今回、フォーラムの前日のサイドイベントを始めてそこから、小中高校生、そして大学生、若い世代が参加していただいて、そして本番においても、玉城座長をはじめ、皆様からご意見を取り入れることで、冒頭の南風原高校の芸能であったり、そして最後の締めの高校生の次世代メッセージ、そして大学生の世界人権宣言に繋がりまして、SDGs 全国フォーラムの厚みを増したというか、基調講演が沖縄に合った平和と SDGs そして観光等の SDGs っていうことで、沖縄らしい題材で構成はしてたんですけれども、やはりこの委員の皆さんの意見を取り込むことによって、若い世代に参加してもらって、厚みを増したフォーラムになったなと思っております。とても感謝しております。ありがとうございます。

（玉城座長）
はい、よろしいでしょうか。
それでは前に進めていきたいと思っています。皆様ご意見ありがとうございました。ぜひこれを少しサマリーという形で記録に残していただけると非常にうれしいなというふうに思いました。
それでは議事を進めて参ります。事務局より資料説明しそのあと次第に沿ってご意見いただく形で進めていきたいと思っています。事務局の方、ご説明お願いします。

（事務局）
はい、それでは事務局より説明させていただきます。
議題1のモニタリングにおけるサマリーの方向性についてということで、資料1の方、議題のモニタリング資料、1ページ目ですが、モニタリング報告書の作成にあたり、昨年度にご説明しておりますが改めてバックグラウンドの考え方をご説明いたします。
1つ目、国内の状況については、国の実施指針の中で進捗を管理するガバナンス手法の確立や、SDGs達成に向けた取り組みを測定すること、ローカル指標を設定すること、このようなことが、地方自治体に期待する取り組みとして記載されております。
2つ目、沖縄県の状況ですが、2021年9月に沖縄県SDGs実施指針が、万国津梁会議SDGsアドバイザリーで議論いただき決定されました。指針の中で、取り組み状況等のモニタリング、進捗のフォローアップの実施や、多くの人々の参画のもと、透明性をもって点検して、フィードバックを図るとされ、その役割は専門部会、アドバイザリーボードに位置付けております。
こうしたことを踏まえ、令和5年度に初めてモニタリング報告書を取りまとめ、公表しているところです。令和6年度のモニタリング報告書につきましても、現在取りまとめ作業をしているところです。3ページ目をご覧ください。
昨年度、モニタリングを作成する中で、専門部会の委員の皆様のご意見の中で、モニタリングの結果を踏まえ、今後どのような取り組みが必要なのか、進捗の増減の要因、理由などの考察をし、その解決の方向が示せていければいい、客観的な指標だけでなく、県民のアクションに繋がる具体例が示せればいいなどの、様々なご意見をいただきました。
また、アドバイザリーボードの会議の中におきましても、定量的な数値だけでなく、定性的にわかりやすく伝える必要がある。サマリーのような報告書が必要ではないかなどの様々なご意見をいただきました。
こうしたことを踏まえまして、令和7年度は、沖縄県SDGsサマリー（仮称）の作成を検討していきたいと考えております。
目的としましては、モニタリングで取りまとめた取り組み状況を客観的に分析し、課題解決に向けた、具体的な取り組みを明らかにすることにより、SDGsの取り組み状況を県民にわかりやすく、共有することで、取り組みの見える化を図ることなどを想定しております。
サマリーを作成することにより、県民、企業、団体、自治体などの、新たな取り組みの創出や、効果的な取り組みの促進が図ることができるのではないかと考えております。
次に4ページをご覧ください。沖縄県SDGsサマリー（仮称）の検討作業イメージの図になりま

す。今回の会議において、サマリーの方向性の検討のため、委員の皆様からご意見をいただきたいと考えております。スケジュールとしては、今回のアドバイザリーボード会議で方向性を検討し、次のアドバイザリーボード会議において、来年3月になると予定しておりますが、方向性の確認をすることを想定しております。

次年度にたたき台を作成し、専門部会やアドバイザリーボード会議においてブラッシュアップをしていき、そのあと、素案を作成し、最終的に沖縄県SDGs推進会議で報告、ということを想定しております。

5ページ目と6ページ目は、サマリーの作成例になり、ヘルシンキのＶＬＲを提示しております。

ヘルシンキではサマリーが3つの項目から構成され、1つ目は、主要指標の変化などが記載されて、2つ目は、現状に関する分析などが記載されております。1つ目と2つ目は、モニタリング報告書で取りまとめているところです。

3つ目は、結果に基づく提言で構成されており、この部分を次年度にサマリーとして作成できないかと考えております。回のアドバイザリーボード会議において、サマリーの対象、誰に対して、どのような目的で、サマリーの柱となるデータ、どのような情報を発信するのか。サマリーの周知、何年ごとに、などのご意見を、委員の皆様からいただきたいと考えております。

どうぞよろしくお願いします。

（玉城座長）

それでは皆様ここから議論させていただきたいと思っています。議論１としましては、モニタリングにおけるサマリーの方向性について、各委員からの意見を承りたいと思っています。

皆様から以前ご指摘を受けました、どういうふうに分かりやすく、誰のためにやっていくか、というご意見を受けまして、事務局として方向性をこういうふうに指示していると思いますので、全国の事例などの方向性がいいんじゃないかとか、JICAさんもいろんなところに出られているんじゃないかなと思いますので、そういった皆様の具体的なご事例があると非常に分かりやすいのではないかと思います。ご意見お願いします。

蟹江委員お願いします。

（蟹江委員）

まず、1つ質問なんですけれども、このサマリーのタイムライン、いつぐらいに達成していく予定なのかっていうその点聞かせていただいてよろしいでしょうか。

（事務局）

完成は再来年の3月に報告する形で作成します。

（蟹江委員）

来年度1年間かけて作成していくっていうことですね。大体、その中でドラフトができるような

感じでしょうか。というのは、なぜこんなこと質問するかというと、最後のところでヘルシンキのVLRの話が出てくるんですけれども、来年、日本も政府でVNRを進めるので、せっかくなので、全国フォーラムの成果も含めて、VLRでまとめて、世界的にも、このまさにヘルシンキのように発信していくと良いのではないのかなというふうに思っていまして、今のタイムラインを聞くと完成版を来年度の、多分出すとしたら7月とかになるので、7月までにというのはちょっと厳しいのかなという感じがしますが、何らかの形でそういったものを出せるといいなというふうに、思っていたところです。ちょっとこの辺、また後でレスポンスをいただければというふうに思っています。

もう1つですね、これはある意味小さな点かもしれないんですけど、昨日のお話をいろいろ聞く中で、この12の優先課題、要するにこの12の優先課題が、沖縄のSDGアクションだということですよね。だから、何かもうちょっと工夫して、例えば昨日あの話、ハワイだとアロハプラスっていう形で出してましたけれども、例えば島の言葉で適切なもの、それが沖縄にとってのSDGsだ、というような出し方をすると、もっといろんな人にこの12の優先課題が浸透しやすくなるんじゃないかなというふうに思いました。

最初の知事の言葉の中でも、ちょっと正確には覚えてないんですけれども、やっぱりこの沖縄の課題を改めて、フレーミングするのにSDGsがすごく適切だと思ったっていうことおっしゃっていたので、ちょっとそのことを意識しながらこの12の優先課題をもう少し、ちょっと魅力的に扱えるような形にするといいんではないかなというふうに思いました。

中身の構成の仕方についてはちょっとまた、後ほど。

（玉城座長）

はい、蟹江委員ありがとうございます。それではオンラインの方から、和田委員お願いします。

（和田委員）

お話を伺っている中で、来年1年間あるといったところなのでちょっと思ったのが、サマリーっていったところでリコメンデーション、レポート結果に基づいてこうした方がいい、ああした方がいいということを提言されていると思うんですけども、こちらを考える主体っていうのが今回見させていただくと、県庁の皆様の方でドラフトされるのかなと思っております。

ただ、ここに関してやっぱり一番、外部の視点っていうのが入ったほうがいいところかなと思いますので、例えば来年1年間あるのであれば、いろんなSDGsのイベントに来た人にインタビューしたりだとか、意見を求めるワークショップを、ステークホルダーに開いてみたり、それこそ私たちアドバイザリーボードの方から提言させていただく形で、サマリーの本編のところでいろんな人からの意見を聞いた上で書いていく、というプロセスがあるというのではないかなと思ったのでお話しさせていただきました。以上です。

（玉城座長）

ありがとうございます。今のはご質問に近いかなというふうに思いますけども、サマリーも外部者の意見を入れながら、何かイベント等、そしてアドバイザリーボード委員を含めた参画の可能性

はありますか、という形ですかね。コメントお願いしてよろしいでしょうか。

（事務局）
はい。貴重な意見ありがとうございます。そういうことを視点でも考えていかないといけないとは考えておりますけど、今どのような形でするっていうのは、決める段階ではないと思っていまして、今日のそういう皆様からの意見を貰って、今後考えていきたいと思っています。次の3月にはある程度、方向性を示せればと思っております。

（玉城座長）
これから、皆さんの意見で議論していくというお考えで和田委員よろしいでしょうか。
次に、北村委員お願いします。

（北村委員）
今のお話を伺っていてちょっと和田委員のご質問にも似たところがあるんですけれども、このモニタリングというのを考えたときに、誰が何の目的でモニターして、その結果を誰がどのように活用するのかっていうのが、ちょっと分かるような分からないようなところがあるかなと思いながら伺っていたんですね。沖縄県として、SDGsの推進に対して、どのような取り組みができてきたのか、自分たちでモニターして、自分たちで評価して、それを自分たちの改善につなげていく、と見えるんですが、それでいいんだろうかって疑問がちょっとやはり出てくる、ということですね。
この自分たちで見るだけではなくてやはり、様々な立場の人たちが、沖縄県としての取り組みが例えば、どうであるのかって言うのを様々な立場から、でもSDGsって、沖縄県庁だけで当然ながら取り組んでいることではないので、様々な人たちが取り組んでいることも、本当はどうにかしなければいけないはずですよね。
モニタリングするってすごく、幅広いことを対象にせざるを得なくなってくるんですが、それは不可能に近い部分もある。誰かがいろんな立場で、例えば学校であるとか、企業、地域コミュニティであるとかいろんなことがやってる取り組みをすべてモニターするなんてことは、当然ながらできないので、この場合はやはり、沖縄県として取り組まれてることをモニターするのかなっていうふうに理解してるんですが、まず質問は、僕のこの理解で正しいんですかねってのが1つと、そうすると最初のコメントに戻るんですが、沖縄県がやってることを沖縄県だけで評価していていいんだろうか、つまりいろんな立場の方々の視点の中で、モニターするべきじゃないかってのが1つ、今申し上げたかったことですね。
もう1つはモニタリングをするっていうのが、モニターして評価をして、そしてその次の改善につなげるっていうプロセスがあるわけですけれども、その評価の仕方、先ほどのヘルシンキの例も1つすごく参考にはなると思います。先ほど蟹江委員がおっしゃったように国がどういう形で、評価するのかっていうのを、横目に見ながら、評価の仕方を考える必要があるかと思うんですが、ちょっとSDGsで気になってるのが、これは国連の指標として仕方ない部分もあるんですけれども、政策目標として立てられてるものを、どうしても数値的に落とし込んで、ターゲットとかっていう

形で指標化して、数字で落とし込んでるわけですが、やっぱり数字で見られない部分をどういうふうに評価するかっていうのはしっかりと、定性的な評価、質的な評価をしっかりしていかなければいけないんじゃないかなと。数字にとらわれない評価というものをやっぱりしっかり考えていくことが必要じゃないかなっていうのがあります。

特にこれはSDGsの中では、なかなか位置付けがされてこなかった。例えば昨日のフォーラムのようなテーマで考えたときにですね、文化みたいなものとかっていうのは、指標化するのが非常に難しいものなんですけれども、その文化的なものっていうのを、沖縄らしさの文脈の中で大事にしてきている。それじゃどういうふうに評価するんだろうかっていうことはかなり難しさがあると思うんですが、非常に沖縄らしいSDGsの取り組みとそれに対する評価、平和っていうのはそこに繋がるようなことがあるかなって気もするんですけれども、必ずしも数値化しづらいものをやはりしっかり評価していくっていうことも、このモニタリングの中では大事にされる必要があるんじゃないかなということを思いながら見ていました。

すいませんちょっと途中で失礼しなきゃいけないので最後、もう1個だけコメントさせていただきますが、もう1つのいただいた資料の中の自治体アンケートで、多くの自治体が、貧困とか教育とか雇用、こういった問題がやはり大事であり、またそういった問題に対して取り組みを進めてるっていうのが見えてるのかなと思ったんですけれども、よりグローバルな課題である気候変動とかですね、そういったものについては、少し取り組みの難しさを感じてるのかなと。

つまり自分たちの身近な課題、目に見えやすい課題は各自治体も、しっかり取り組まれてるけども、それがどういうふうに、自分たちがやってることがどういうふうに大きなグローバルな課題に対して貢献してるのかっていうのが見えにくい。見えにくいっていうことは、先ほどの評価話に戻ると、どのぐらいそういったことができてるのかっていうことを検証するのがすごく難しさを感じてる。

雇用とか貧困対策とか、教育の問題っていうのは、おそらく指標化がしやすい、目に見えやすい、自分たちの身近な課題ですので評価もしやすい。でも、気候変動みたいなものに対しては、自分たちの取り組みがそこにどう貢献してるのかが、やっぱり見えづらくて、評価もしづらいということになるかなと思いますので、評価しづらいものをどう評価していくのか、その時に、やっぱり指標だけ、数字だけを追っかけようとしすぎないで、定性的なものも含めて評価していくことが大事じゃないかななんてことを、これは次のご説明になるんだと思うんですけど、いただいた資料を見たときに、そんなこともちょっとモニタリングの話と絡めながら感じましたので、ちょっとコメントを述べさせていただきます。

すいませんちょっと雑駁なコメントになったかもしれませんが、以上です。

（玉城座長）

はい、ありがとうございます。北村委員の今の確認事項、おそらく皆さんも同じことを感じてらっしゃるかもしれませんで、事務局の回答がもしできればお願いしたいんですけれども、このモニタリングというものは、沖縄県としてやっているものを、沖縄県を中心としてモニターをしていってそれを公表していくという理解になるのでしょうか。

（事務局）
　今の段階では、どこまでっていうのは、決まってないことであるんですけれども、沖縄県がやってることが中心になっていくのかなと考えられますけれども、県民向けにわかりやすく、という視点でやっていきたいと考えておりますので県民にこうして欲しい、というのを伝えるのにどこまでの範囲でやるべきなのかとか、方向で考えていきたい。

（玉城座長）
今後それは変わっていく可能性もあるというのもあるんですよね。
もう１つ北村委員の今おっしゃった、この質的な部分ですね、定性評価、文化等、気候変動とグローバルイシューに対して、なかなか見えにくいですし私たちの生活を反映してるのかしてないのかわからない部分も、どういうふうに沖縄県としてやっていくのかっていうところはご意見として、おそらくまた今後吸収されたら、いいのかなというふうに思います。
北村委員、これでよろしいでしょうか。一旦、議論に載せていくと。

（北村委員）
　はい、ありがとうございます。
　ぜひ、またいろいろと今後の方向性、検討されていく中でまた意見を述べさせていただければなと思います。

（玉城座長）
　あと今の疑義に対して、もし、沖縄県が行政として、沖縄県を中心としてっていう、私もそれはそうだなあというふうに思いましたので、例えばこういった事例があるよとかっていうのがもし、北村委員がご存じであればまた私たちに共有していただいて、モデルを少し見せていただければいいかなというふうに思いました。

（北村委員）
　わかりました、ありがとうございます。僕もちょっと調べてみますね。すいませんちょっと今日ここで失礼することになって大変申し訳ございません。（オンライン離席）

（玉城座長）
　それでは島袋委員、お願いします。

（島袋委員）
　サマリーというのは中心はリコメンデーション、だと思うんですよね、それにはどう評価するかが重要です。評価をするということ、行政がやったこととかパフォーマンス、或いは組織のパフォーマンスに対する評価っていうのはいろいろやり方があるんですけれども、例えば大学とかだった

ら、第三者評価委員会を作って、完全に部外者の方々に、大学のいろんな事業、いっぱい大学にも事業がありますので、計画とか、中期目標・中期計画、様々なものを全部見てもらって、それに基づいて本当に厳しい評価をしてもらうとかあるんですよ。

それはもう手前みその評価じゃなくて、部外者なので相当厳しくその評価に対応して修正していくんですよ。沖縄県のＰＤＣＡは、手前みそですよね全部。企画調整課が作って書いて、あとは自分たちで書かせてそれを合算して終わりという形です。外部の人が関わってきて、一緒になって評価して、厳しく改善を要求するってないじゃないですか。

だから、この沖縄振興 PDCA の評価、県庁ホームページにバーッと出るんですけど、あの仕組みでやってもあまり意味がないし、市民、県民も参加してないし、それであの評価によって何かが解決されることもないというところですよね。

だからああいう、自分たちで書いて自分たちで自己評価して、自分たちで改善に生かすって言うんですけれども、もう評価も改善も放っておくっていう形になってます。したがって、あの方式ではちょっと意味がないんじゃないかなというところです。

それで、県でとても参考になるのって言ったらおかしいですけど、大学の第三者評価委員的なものは、県で近いのは監査委員とかのイメージなんですが。監査報告書とか読むとですね、専門家の立場から、公認会計士の方とかがやってくれているんですが、結構厳しい指摘がでることもあります。

いずれにしても第三者で、もちろん県の委員の方、事務局の方は結構手足となって働いていて、いろいろ文書を集めてもしかしたら書いてるかもしれませんけれども、だけど本当に第三者的な評価をして、厳しい評価をしてくれるんですよね。

ここに県民の参加を組み込むいう場合、例えばイギリスの会計監査とかは、一定期間、意見があると、全部その住民が、この監査のプロセスに入ってきて、監査委員に意見を言うんですよ。文書を出したり、こういう評価しようとかいうこといえるんで、そのための公開と参加の期間を設けて監査委員と、住民が一体となって評価を作り出す、そういったところがあるんです。

それを参考にしながら、評価については、例えばこのグループで原案まで作る。３月までに原案を作るっていうことは、やってやれるかもしれませんけれども、そこはもう皆さんご多忙ですのでちょっと厳しいかなとは思いつつ、だけど、やはりこの委員会があるのであれば、この委員会でかなり評価改善の部分に関しては、きちんと読んで、最終的に責任を持って、こういう改善、サマリーを出しましょうって、やったほうがいいんじゃないかな。

そのプロセスの中に、県民の意見を広く集める期間をちゃんと設けて、それでこちらで議論して、責任を持って出すという形が一番いいじゃないかなと。

ちょっと仕事がいっぱい増えるような発言をして申し訳ないんですけれども、そういう形が一番いいかなと、これは私のイメージですね。

これから議論するということでしたけれども、その評価ということに関しては、内部評価・自己評価っていうことは評価の力としては弱くなるので、外部性をいかに確保するかっていうところが重要でですね、その外部性の中に県民を主体とした参加を組み込むというのが１つ必要なのかなという意見です。

（玉城座長）
　これは、質問ではなく意見ということでよろしいでしょうか。

（島袋委員）
　はい、意見です。

（玉城座長）
　ということで、今、沖縄県通常やっている自分たちでやったことを自分たちで評価し、その評価を出したことが本当に、改善、新たなものに繋がっていくのか、行革にも繋がっていくかなと思うんですけれども。今までのやり方を変える必要があるんじゃないかと、まさにSDGsが役立てるんじゃないか、というご意見でしたので、しっかりと受けとめていただければと思います。
　はい、他になにかご意見ありますでしょうか。はい、平本委員、お願いします。

（平本委員）
　サマリーを作るっていうこと自体は非常に素晴らしいことだと思います。他方で、モニタリングの報告とサマリーは通常セットで出てくるので、そのタイムラインが結構長いというのはすごく気になります。そういう意味で言うと、やっぱり時間をかけて作るだけの意味がないといけないと思うんですよね。例えば、自分たちで勝手にサマリーを作るんじゃなくて、その読み手になりうる市民と一緒にサマリーを作りますっていうことであればどうでしょうか。当然時間をかけていってやらないと、できないものですので、しっかりと市民を巻き込んで、というのは案としてはあり得るのではないかと思ってます。
　SDGs全般の取り組みにおいて、すごく大事だと思ってるのは、やっぱり社会が変化をしていってることを、多くの人が実感できるところなんですね。なので、このサマリーを出してそれに対して、こういうふうな形で今後改善していきましょうという話が出て、それが実際に反映をしていくというところまで、セットで考えていくことがすごく大事になるんじゃないかと思います。
　その時に、サマリーとして進めるのであれば、重点化されることになりますので、沖縄県のユニークなポイントに重点化してしまっていいんじゃないかなと思います。イベントで話題になった平和や文化等、多くの方が関心を持ってるところに少しフォーカスをして、そこの部分に関して今の現状や県の活動を、県民の人が受けとめられるような表現とは何か、自分たちはもっとこういうようなところを知りたいんですとか、について議論をしていただいてもいいんじゃないかなと思います。
　ちなみにですけれども、本学周辺の例えば野々市市では、若者議会というものが作られていて、小中高の生徒会の中から数名参加していただき、大学生と一緒に議論して、現状の取り組みに関して、理解をした上で、自分たちの意見を考え、その後実際に市議会の議長・副議長に、自分たちの提言を渡し、実際に議会の中で伝えていただくという形で、若者たちの意見が伝わるプロセスを作っています。

さらにそこからじゃあどう反映するのかは、まさに大学と連携をしながら、実際にその若者がアクターの一部になりながら、それを実現するアクションを行うところまでワンセットで作り込んでいます。

一番失望されてしまうのが、発言や提案をしたけれども無視されたということです。結局提案が反映されない、みたいな話になるのが実は組織論的には最悪な状況です。言ってもしょうがないじゃないかっていう感じになってしまう。そうすると、もう言わないという状況になってしまい、結局は県で進める SDGs に関しては興味がないというような状況に陥ってしまいます。そのため、やっぱり言っていただいたことに対してちゃんと対応するというプロセスをどういうふうに作っていくのか、このサマリーの中でしっかりと組み込んでいただくと良いのではないかと思います。

少しまとめるとサマリーは、平和と文化に重点を当てて伝える。そしてさらに県民に伝えるのはウェブサイトとかに出すだけじゃなくて、何かワークショップなどの場所で少し対話をしながら、伝え方も一緒に考える。その中で、一緒に提言を作っていったものをしっかりと反映できるようなルートもきっちりと確保しておく。そして、反映したことがわかるように外部に伝える。こうした流れを設計しながら、進めていただけるといいと思います。

私個人の意見としてはそういう流れについて、若者を中心に作ってもらうとすごく効果も大きくなるのかなと思いますので、若者にフォーカスするのか、グループの１つとして若者を入れるのか、どちらかの観点で加味していたらありがたいなと思います。

（玉城座長）

今の平本委員の意見も大事にしてですね、サマリーのレポートに、変革しているものがやっぱり見える化されないと、出しても変わらないというのは確かに、皆さんアンケートだけで結局何も変わらないとなると答えたくなくなるとも聞きます。皆さんに聞きたいのが、12 で優先課題って私たちがとして作ったじゃないですか。そこと、文化とか平和というのは多分、昨日の影響もあって出てきてるんですけど、私は 12 の優先課題を一旦中心においた方がいいんじゃないかなというふうに思ってるんですね。

例えばその見直しを、昨日先生も言われました、内閣の方も見直してるっていうのもあって、これは一旦見直して、この評価にしていくのかどうなのかというのはおいてでも、私は結構あれは大学生の今、大学コンソーシアムの事業、共通授業を出してもらっていて 12 の優先課題から実は始まってるんです。そこはちゃんとこの県内の大学生には理解してもらった上で、大学生にはアクションプランを作ってもらっているっていう状況なので、私は一応アドバイザリーボードの人間としては、中心に沖縄の優先課題はこれなんだよねっていうことから始まると、すごく結構皆、学生さんはストンときて、様々なものに、派生するなんていうのはあります。

もう１つ、今、こども家庭庁ができて、このまさにこども真ん中、そしてこのこどもの権利の 4 番目ですね、こどもの参加・参画が非常に日本は弱かったっていうところで、しっかりと子どもを巻き込むではなくてこどもを主体として、政策づくりをしていこうという流れが今後、主流化していくと思います。

それで今年私も2大学の非常勤持っている大学の学生さんにファシリテーターになってもらって、その子たちが地域に下りて行って、その子たちが生徒さんたちと関わりながら、沖縄において子供たちがどんな夢を持ってるのかな、どんなことで困ったことがあるのかな、もっとこんな応援があったら自分が頑張れるのになっていう、4つの単純な質問なんですけど、いいところと、本当に欲しい応援っていうので、こどもこどもたちとワークショップを展開して、それで40名ずつの学生が、結局400人ぐらいのこどもたちの意見を吸収したっていう仕組みがあって、これは今年沖縄県は、今年度末までにこのこれは大学生は大体800人ぐらい聞いたんですけど、全県的にアンケートをとって、こども、そして親世代、そして困難なことも含め、2000人以上聞いた結果をちゃんと政策に反映した結果を今回公表すると、来年度に何をやるかっていうと、こども家庭庁は大人のファシリテーターを育成しましょうっていうことなんか言ってるらしいんですけど、一応このこども未来部の方々の考えたのは、今年大学生の活用、本当にめざましいものだったんで、もう大人じゃ遅いと、大学生をファシリテーターに、来年は見据えて、その上で彼らが本当に地域に下りていくってことをしっかりやりましょうというふうになってるんですね。

なので、私は彼らの活動っていうのが非常にやっぱり目覚ましいですし、すごくこのSDGsの12の優先課題も実は授業の中でしっかりと教えた上で、ファシリテーターで地域に下りていくってことをやるので、だからそことやっぱりちゃんと連携をしていって、もうファシリテーターぐらいの技術を彼らはすごく、素晴らしい持っているので、そういった彼らとの連携が非常に重要かなっていう、思っています。

もうすでに県庁の中で仕組みを作りつつあるので、ぜひこのSDGs推進室の方もそこと連携されると私はいいんじゃないかなっていうふうに思います。一意見ですね。

はい、蟹江委員お願いします。

（蟹江委員）

ちょっと確認なんですけど、このサマリーが出るということで、本体はどうなりますか。本体のサマリーですよね。本体はモニタリング報告書っていうことになるんですかね。

（事務局）

モニタリング報告書は毎年、あるじゃないですか。サマリーを毎年するのか、3年ごとにするのかというのも、まだ決めてないんですけれども、ある程度の期間ごとにやることを想定していて、そう考えると、別冊みたいな感じになるかなと。

（蟹江委員）

そうするとモニタリング報告書は、毎年やりますと、それはアクションプランに、今おっしゃられた12の優先課題が出てますよね、それで出していくと。だけど、何年かに1回、今で言うところのサマリーが出るっていうことですか。

（事務局）

そういうイメージでいます。

（蟹江委員）

だとすると、今、島袋委員おっしゃったように、サマリーというよりもむしろ、別の名前にしたほうがいいと思います。評価報告書とか、沖縄版ＶＬＲでも私はいいんじゃないかなという気がしますけれども、沖縄版のローカルレビューで何か、その沖縄らしい名前をそこにつけるっていう、外に対しては VLR だと、中では、これは沖縄らしい名前の評価書というふうにすると良いのではないのかというのが１つです。

それから、今ご議論、私も玉城委員のご意見に賛成で、12 の優先課題を中心に評価するっていうのが、非常に重要ではないかなというふうに思います。

それと今、国の方で VNR をまとめてるんですけど、もしかしたらそれがちょっと参考になるかなと思って、ちょっと情報共有しますと、VNR の方はですね、国が指標を中心に分析するところっていうのが前半にあります。この数字はこんなになってますという説明と、簡単な解説がもしかしたら入るぐらいだと。それとは別に、第二部にステークホルダーの取り組みと評価という形で、ステークホルダーが評価する部分を今作っています。

そこはですね、今回は今のところですけれども、13 のステークホルダーに分けて、13 のステークホルダーにそれぞれタスクアウトして、皆さん書いてくださいと。その取りまとめを、私がやることになってるんですけども、文章整えて、全体をまとめてもう１回みんなに返して見ていくと、そんな形になってるんですね。

その 13 個申し上げると、ビジネス含む、中小企業、が１つ。２つ目がファイナンス含む地方金融。それから３つ目が市民社会、４つ目が消費者、５つ目が公共的な活動を担う民間団体ということでわかりにくいですが、これは生協であるとか、そういうところですね。そして６つ目が労働組合。７つ目がジェンダー、８つ目がユース、９つ目が教育機関、10 個目が研究機関、ただこれは教育と研究一緒に設置してもいいのではないかという議論もあります。それから 11 個目が地方自治体、12 個目がメディア、そして 13 個目が議会ということで、これは円卓会議の構成員ベースで、こういったステークホルダーがあるだろうというので、みんなで書きましょうといって分担してるようなところです。

従って、今のいろいろご意見出てるところ見ると、沖縄県の中で、プラットフォームとか、いろんな仕組みがありますので、そういった方々に、ある程度自分たちの活動を中心として、こんなことやってるというのを書いていただいて、エビデンスに基づいて、何月何日にこんなことをやったから、こういう活動を入れるとかっていうのも含めてですね、書いていただいて、それをこの委員会でまとめるなりして、文章に整えてこれは大事ですかと確認する。その他にも、入れることがあったら言ってくださいっていうので、何かそういうやりとりをすると、本当に沖縄県で SDGs の活動どんなふうに行われてるかっていうのがわかると思いますし、載せられた方も責任を持たざるをえなくなると思うので、これ書いたからには、やっぱりちゃんと次もやんなきゃいけないっていう気持ちになると思いますし、そういうやり方が１つ有りうるのではないかなというふうに思います。

（玉城座長）
蟹江委員ありがとうございました。
それでは佐野委員お願いします。

（佐野委員）
改めて、実施指針やパンフレットを見ていたのですが、まさに今、蟹江委員がおっしゃった、ステークホルダーをちゃんと実施指針に書いていたのですよね。国の実施指針を参考にしながら書いたこともあり、基本的に並びはほとんど一緒なのですが、私たち万国津梁会議のメンバーの議論では、文化・芸術・スポーツ振興、議会、その後には観光客、世界のウチナーンチュ、ウチナーネットワークなど、沖縄らしさも入れていました。実施指針は、万国津梁会議で案を作成して提言し、県の推進本部で改めて策定し、承認された政策文書だと思います。なので、この「ステークホルダー」に沿っているか、ここに挙げられた皆さんから意見を聞くというのが重要ですし、先程の「平和」や「文化」にフォーカスしたいというところも、このステークホルダーの記載に入れていたので、ここで掲げられている人たちからお話を聞くことによって、沖縄らしさというのが出るのではないかと思いました。
ＪＩＣＡも途上国で行っている事業についての事業評価や、組織としてのサステナビリティの報告、行政機関的な側面での業績報告など、いろいろな報告があって、それぞれターゲットや評価者が分かれています。決算時に出す事業報告もありますし、たくさんあって、1つにまとめようという話も出ますが、見る人も違うし、観点も違う。中身に齟齬がないようにしつつ、それぞれの見方もあるから、分かれていてもいいのではないか、ということになっています。
今、サマリーと言われている、実態の評価報告書というのは、ワンフィッツオールのようにすると、なかなかわかりにくくなるのではないか。軸となるのは12の優先課題であり、それが載っているのは実施指針です。実施指針で、巻き込んで一緒にやっていきましょうと言っているステークホルダーの皆さんから見て、この12の優先課題が、自分たちの巻き込まれ度合いも含めて、どうだったのかということが、モニタリングの中で数値として出てくるわけです。
数値で定量的な評価が出てくるわけですから、もうちょっとそのストーリー、いわゆるナラティブと言われているような、書き下ろすやり方が、皆さんが今イメージしているものに合っているのかなという気がしました。前回の宮古島での会議でも、12の優先課題で17個のゴールが割り振られているわけですが、数値指標を見ても、12の優先課題の1つ1つの課題が達成されているのか、達成に向かっているのかというところが今ひとつはっきりしない、といった部分でいろいろご意見があったと思います。なので、その12の優先課題の1つ1つを見て、こういうものを目指していたのだけど、本当にそれが達成されていると実感できているか、とか、達成に向かってアクターの皆さんがアクターとして巻き込まれているか、というところを測る。何年かに1回だったら、そこを吸い上げていく方が、これを作る意味も感じられて、次に繋がるものになるのではないかと、委員の皆さんのお話を聞きながら思いました。

（玉城座長）
はい、ありがとうございます。
そちらをぜひ実施指針を、さらにもう一度読み込みたいと思います。ありがとうございます。
今年の SDGs の日に、県庁が評価レポート新聞で出されたじゃないですか、沖縄タイムス社の方の、結構活字になったと思うんですね。あれを私もちょっと読み込んだときに、数字を見ると、こどもの貧困っていうのがすごく沖縄の中では注目されたけれども、評価をレポート見ますと、実は65 歳以上の貧困層がもう桁外れに多かったっていうところも衝撃を受けたんです。
だからやっぱり、課題と、数字をちゃんと示していくことと、本当自分たちがそこに何ができるのかなっていうことはすごく大事にして欲しいなっていうのと、もう 1 つ私 JICA さんに期待したいのが、やっぱりグローバルイシューがなかなか結びつきにくい、で JICA 沖縄さんがいらっしゃって、今までもいろんな形で何年も共に歩いてきたと思うので、その見えにくいところを、JICA として、まぁ本部と考えるのか JICA 沖縄として考える、いろんな今、水事業であったりとか、ジェンダーの問題とかいろいろなものを、あと紛争の、昨日もお話で、すいません私も初めて知ったのが、ウクライナとカンボジアとセットで実は沖縄の経験が生きるんだって思ったら、今後の可能性に関しても、もっともっと私たちはするべきだなっていうふうに思ったんで、そこの部分で何かストーリーか、コラムか何かわかりませんけれども、やはりその、グローバルイシューを折角なので、貢献していただければいいのかなと思いました。
はい平本委員、お願いします。

（平本委員）
はい、ありがとうございます。非常にいい議論ができているように感じております。
今までご提案があったように、おっしゃるように、12 の優先課題がベースで、ステークホルダー視点という形に大きくハンドルを切って作っていただいた方がいいんだろうなと思っています。おそらく実施指針で設定した枠組みでのステークホルダーの方々の視点からいうと、12 の重点課題も全てイコールではなくて、私たちの視点からするとここが一番大事だというところが絶対あると思うんですね。
そういう切り口で、ここにフォーカスっていう形で話をしてもらった方が、読み手にとってはわかりやすいと思うんですね。やっぱり SDGs もそうですけど、17 個にまとめても、全体でって話になると、全部とらえるって難しいねって話になるので、取っかかりがどこなのかは分かったほうがいいと思います。ここはもうしっかりとステークホルダー視点で、12 の優先課題もフォーカスする部分を決め、関連する取り組みについて評価をすると決める。その時にすでに動いているものとうまく連動していることはとても大事になるため、ステークホルダーの方の活動をちゃんと紹介する。その上で自分たちと県の動きはどこに接点があるのか、ここはすごくよかった、新しくこういうようなところは期待したい、という意見を示す。実例が入ってくるので、すごく沖縄らしさが表現されると思うんですね。
注意して欲しいのは、沖縄という言葉を消したときに、どこの自治体かわからない記載になっていると意味がないということです。そうならないためには、すごくナラティブな話が組み込まれて

いることが重要です。私たちもこういうふうに議論しておりますけれども、私たちの意見よりも、ステークホルダーの生の視点として、報告、評価をしていただくのが一番大事なのかなと思っております。多分ステークホルダーの方々も、自分たちの取り組みを後押ししてくれる取り組みなのであれば、積極的に参加をしてくれると思います。そのために、例えばレビューをしたら、その組織の活動をちゃんと後押しをしてくれるというインセンティブが見える化されていると、多くの人たちの参画を促すことが出来るのではないかと思います。いきなり最初から理想的なものはできないと思いますが、ぜひ県の皆さんが活動してる中で、ここは結構一緒に連携してくれてるなという組織もあると思いますので、県の方からお願いしますとお声がけいただいて、進めていただくのがいいのではないかと思いました。以上です。

（玉城座長）
はい、渕辺委員。もしよろしければ何かご発言、感想でもよろしいけれども、ありますでしょうか。

（渕辺委員）
昨日も参加できませんで失礼いたしました。
今、長野に来ておりまして、外が０度で雪が降っております。長野と沖縄の交流会がありまして、長野県の方は知事も出られたものですけど、私も沖縄の代表として来ているところであります。
昨日イベント、皆様のお話を聞きますと本当にすばらしい内容だったと、改めて思っているところです。
その昨日の結果をどういうふうにして活かすのか、一過性のものにしちゃいけないというのをつくづく感じているところでもあります。ですからそういったことから、いろいろな話が出ておりますけれども、出たものを如何に中に入れ込むかということも重要になります。
それから自治体アンケートを拝見しましたときに、自治体も計画の中には入れていますけども、全部には実施していない、あるいは計画してないところも見えますが、企業もそうです。非常に意識あるけども実現にまだ着手してないとか、まだ取り組んでないところがあります。このギャップ、課題が何かということをあぶり出すのも大事なのかなと思っております。
SDGs に向かう目的は何か、なんですけど、ただ目標として掲げるだけではなく、実際全員がそこにどうやって向かえるのか、そこに参画できるかっていうことなのかと思いますけど、そこに至らないところの課題の抽出も、必要かなと思っているところでもあります。
それから先ほどもからお話が出ましたけど、数値化できない評価をどうするか。非常に微妙な問題だと思いますけど、この評価の基準をどこに置くのかということは、これも課題の一つではないかなと思っているところでもあります。
もう一つ、先ほどから子どもの問題とかいろいろ、幅広い組織の名前が出ましたけど、企業こそ、それこそ貧困でも教育でも何でも関わっているんですけど、企業の取り組み、一緒になってやってるけど取り組みの部分が見えないといいますか、企業も一生懸命やっており、最近は SDGs を

やってないところは採用にも影響するというぐらい、SDGs を意識しています。ステークホルダーとのタイアップのさせ方もまだ薄い気がします。

また企業もですけど沖縄においても、それぞれ大企業、中小企業、零細企業では全然違いますので、対象者のどこにもう 1 回アンケートするかというところも、意外と大きな課題なのかなと思っております。

いろいろ資料を出したとしても、いろんなことで反論される、あるいは SDGs が実施されないという、その原因をきちんと把握した上で、全員がある意味で納得できる指標を作るとか、全員は無理ですけども、ある程度納得できるところ、作っていくべきかなと思っています。

非常に意識の高い人とそうでないところとまだまだギャップがあると思いますので、意識の高い人が引っ張っていくことこそ、リーダーシップが必要ですけど、どうやって幅広く同じところを見ていくか、見させていくかということも、この会議の中では、必要なところじゃないかなと、取り組みとして必要じゃないかなと思うところでもあります。

すみません、なかなか参加できず、意見だけ寄せていただきました。よろしくお願いいたします。

（玉城座長）

はい、企業への声のかけ方、また中小企業、零細企業それぞれ違う。そして新たな視点ですね、参加できない、参画できない方々の分析ですね。なぜ参加できないのかというところもぜひ入れていただきたいという点も、よろしくお願いします。

それではすいません、皆様の議論も深まっているんですけれども、次の議題にいきたいと思います。

続きまして、事務局の連絡、報告事項ですね、令和 6 年と、SDGs 取り組み状況について、報告事項２、令和 7 年度推進の取り組みについて、参考資料等ありますので事務局の方から説明お願いします。

（事務局）

はい、令和 7 年度における取り組みの方向性について、資料の 7 ページ。まず、令和 6 年度の取り組み状況について、上段の令和 6 年度の取組状況についてご報告いたします。

今年度は昨日開催しました SDGs 全国フォーラムを開催し、県内国内外に向け、沖縄らしい SDGs の取り組みを発信することができたのではないかと。

今回開催しましたフォーラムを通し、今後も多様な主体の参画や取り組み創出の促進を図っていければと考えております。

おきなわ SDGs プラットフォームでは、9 月にみんなで SDGs と題して、県民参加型のイベントを実施しました。中学生、高校生、大学生と企業や団体が共同で企画し、県内各地でのゴミ拾いや、食品ロス削減に向けたイベント、その他にもまちづくりの課題にアイディアを出し合うアカデミーなどのイベントを実施しております。

また、玉城座長が講師を務められた大学コンソーシアム沖縄において、参画している県内 3 つの

大学、琉球大学、名桜大学、県立芸術大学が同時に受講する共同科目、「SDGs と沖縄の未来探求」において連携を図り、学生がみずから取り組んだ課題のアクションプランについて発表を行うなどの新しい取り組みなどを行いました。

モニタリングにつきましては、1 月末または 2 月上旬に専門部会を開催し、SDGs の取り組みの進捗を検討します。

また、3 月ごろに開催を予定しておりますが、アドバイザリーボード会議でモニタリングの報告をできればと考えております。

続きまして、下の段の令和７年度の向性について、説明します。令和７年度の取り組みについては、多様な主体の参画と連携と取り組みの見える化を図っていきたいと考えております。
多様な主体の参画と連携では、今年度も連携している大学コンソーシアム沖縄との連携の強化や、若者を巻き込んだ取り組みの充実を図っていきたいと考えております。

また、新たなネットワークの連携として、島しょ地域のグローバルネットワークであるローカル 2030 アイランズネットワークの、参加検討を行いたいと考えております。

取り組みの見える化については、県民に SDGs の取り組み事例わかりやすく伝えるための方法や、SDGs の進捗わかりやすく伝えるためのサマリーの追加を行いたいと考えております。以上が報告となります。

アンケートは、その参考資料の令和 6 年度の市町村アンケートについて、ご説明します。
市町村の SDGs 推進の受状況把握や、市町村と連携した取り組みに役立てるため、６月から７月に沖縄県内の全市町村を対象にアンケートを実施いたしました。

アンケートの総括としては、市町村の総合計画や政策方針等への反映は、昨年度実施したアンケートよりも大きく伸びております。

市町村においても、SDGs の達成に向けた取り組みが進んできたかと考えております一方で、17 ページの SDGs 推進の課題については、経験や専門知識がない、先行事例がないなどの課題を挙げられております。

県としましては、市町村職員を対象とした研修を実施しながら、先行事例の共有や視察研修などを通して、連携の強化を図っていきたいと考えております。

このアンケートの 4 ページの方から、実際の数値結果となっておりますけれども、計画への反映などは伸びてきているんですけれども、やっぱり体制づくり、組織体制づくりなどはなかなか伸びていない状況にあります。

やっぱり市町村では、計画に組み込むまではできてもそのあと、推進体制を整備して、実際、SDGs に取り組んでいくっていうところが、不足しているのかなあと感じておりますが、どのように市町村と連携していけるかなというのを、いろいろ考えているところでありますが、毎年、市町村の職員との研修、連絡会議を実施しておりますので、その中で、もう少し、各市町村の状況を、丁寧に聞いて、どうバックアップしていけるかっていうか、考えていかないといけないなあと思っております。

今年ちょっと、研修として、職場環境のデジタル化っていうところで、沖縄セルラーを視察しに行ったり、食品ロスのお店を視察したりっていうことを入れたんですけれども、そうすることで、

ちょっと感じたのは、今 SDGs を担当しているのは計画の企画部の部署なんですけれども、今回デジタル職場のデジタル化の視察を入れたことで、このデジタルを推進している課が、参加したりっていうのが見えたので、個別の課題にちょっと着目して研修を実施したら、また違う方向が見えてくるのかなというふうにも今年は感じました。以上です。

（玉城座長）
こちらは 3 点ですね、報告事項なんですけれども、何か意見をしていいということですか。

（事務局）
何か意見があればお聞きしたいです。

（玉城座長）
来年度の取組でしたり、アンケートにご意見があればお願いします。はい、島袋委員お願いします。

（島袋委員）
質問 1 とか 2 とかの方は、「取り組みを推進されていますか」という問いかけでは、具体的には何をしてるかわからない。「推進されていますか」っていう質問なら、「推進してしていますよ」っていうぐらいの単純な答えが返ってきたという、そんな理解でいいんですか。その総合計画もそうです。「計画反映を実施していますか」って聞かれたら、「実施していますよ」って答えてしまいがちで、具体的中身がわからないじゃないすか。
何をもって「実施してる」って言ってるのかっていうのは分からないんですけれども、それはもうこういうアンケートの書き方なんで、その人たちが、言うことをそのまま反映っていうことになるんですか。
本当にどんなレベルで実施してるかとか、気になるんですけど、それはもうわからないっていう理解でいいんですか。

（事務局）
そうですね、各市町村の実際のレベルはきちっと、把握しておりません。

（島袋委員）
できればこのフルペーパーあるんだったら欲しいんですけどもらえます。

（事務局）
アンケートしたときのですね、はい。

（島袋委員）

特に自由記述とか、何書いてるのかな、というところと、一応全体的に見ますけれども、市町村、本当に相当計画に反映させているのかなとちょっと疑問とか多いので、反映しているんだったら、その市町村を私が見てきますので、どの程度実施しているか見てみますので、そのどの市が実施してって言ってるのか、それをちょっと知りたいです。

（事務局）
個別具体的にということでしょうか。

（島袋委員）
はい、どうぞお願いします。
何かしら市町村にもっと、きちんとやってもらうために何かしらもうちょっと働きかけないといけないんじゃないかなっていうのが、実際の感想です。ちょっといろいろ考えてますので。

（玉城座長）
はい、ありがとうございます。それでは、平本委員お願いします。

（平本委員）
下のご説明いただいた中で、令和７年度に向けて取り組みの方向性について意見させていただければと思います。
まずこのローカルアイランドネットワーク、国際的なネットワークへの参加検討っていうのはぜひ進めていただければと思っております。日本としても、島しょ国という、非常に重要な国際的にも重要な立ち位置にあると思っております。その点について、昨日のフォーラムでもあったハワイと沖縄でイニシアチブをとって、どんどん前にすすめてでいただくことは、とても重要じゃないかなと思っています。
そしてせっかく参加をしていくということであれば、ぜひ若者も巻き込む形で取り組みをしていくことを、お願いをしたいなと思っております。
今回、ちょっとサイドイベントにも、関わらせていただいた中で、感じたところが１点ありまして、この辺はぜひ実施のときも、ご配慮いただきたいなと思います。というのはですね、沖縄の県外の若者とどういうふうに接点を持ってくのかというところですね。
私どもの方でも、いかに沖縄の出身者の若者に今回参加してもらうのか考えましたし、実際にサイドイベントを実施する中で、沖縄の中高生がどう考えてるのかを聞くシーンもあったんですけれど、継続的に沖縄に関わり続ける仕組みは十分ではないと思っています。
本学の沖縄県出身者についても、沖縄に将来的には戻っていきたいという意向はありますが、接点をとり続けることができないという課題がありました。
その時に、その人だけをピンポイントで声掛けして沖縄県の取り組みをつなぐっていうのは結構無茶な話で、若者の観点からいうと、誰と一緒にいろんな行動するのかということの方がすごく大事なんです。当然県外に出てる人達は、県外の友達がいて、一緒に活動している。なので、その子

たちと一緒にできるんだったら参加したいけど、沖縄県だけでくくられるのであれば参加しにくい。となり結局、沖縄県との距離が広がっていくと、もう沖縄県に戻れないという話になる。じゃあ大学のある地域で就職しようかとか、東京とか大阪で就職しようかという話になってします。

なので、結構ここは真剣に考えないといけないと思うんですね。アイランドネットワークのような、沖縄が象徴となっているけども日本としてもすごく重要な国際的な取り組みの中に、入っていくとなったときに、県外の若者たちも、県出身の子たちと一緒になって参画していくという取り組みにしていかないと、せっかく SDGs について意識を持って活動してくれた方が、大学になって県外に出て、そのまま県外で住み続けるみたいな話になってしまうと思います。

なので、県外の若者の方をうまく巻き込むことによって結果として沖縄県に戻ってくる若者を増やしていくという視点っていうのも、少し重点を置いていただいた方がありがたいなと思っています。

その時に、今、企業の認証制度の方も非常に難しいところに力を入れてやっていただいてると思いますので、若者が継続的に沖縄に関わる仕組みができた後に、戻ってくるきっかけとして当然就職活動が重要になってきますので、そこでその認証企業の方との出会いの場を設定していただく。ちゃんと沖縄に戻って生活するための準備をしながら、活動ができますよという話があると、大学生にとってはメリットが大きいので、関わろうという話が出てくるのではないかなと思います。

このように 3 つに分かれた取組ではありますけれども、うまく有機的につないでいただいて、効果を上げていただけるとありがたいなと思います。

（玉城座長）

それで和田委員お願いします。

（和田委員）

ありがとうございます。私も平本先生のご意見にすごく賛成しております。

そういう意味で少し議論ずれるんですけども令和 7 年度における取り組みの方向性について、ちょっと質問というかお願いがございまして、これって結局いろいろ取り組み書いてくださってますけども、アドバイザリーボードと我々として何ができるのかといったところをちょっと整理させていただければと思っておりまして、こちらの取り組みの見える化のモニタリング報告書に関しましては先ほどご説明いただいたとおり取り組むものだと思っております。

ただ、他の議題ともろもろに関しまして、結構アドバイザリーボードも年によって回数が違ったりとか、あと結構会議で出た内容、盛り上がって結局そのあと 1 年後ここに帰ってきて、やらなかったね、みたいな形になってるなと思っておりまして、SDGs 全国フォーラムに向けて、この前のような臨時開催という形でいいと思うんですけども、具体的に来年度が見えてる中で我々は、どのタイミングでどう関わって、どこでアドバイスしていくのかみたいな形のご計画をいただけるとすごくいいかなと思っておりまして、こちらは例えば来年 3 月ごろ、計画を立てる際に、次の会議においてご説明していただければすごくうれしく思っております。以上です。

（玉城座長）
はい、蟹江委員お願いします。

（蟹江委員）
今、和田さんおっしゃったこと、その通りだと私も思いました。この来年度の取り組みに行われているところをぜひ進めていただきたいと思いますし、ローカル 2030 っていうのもぜひ進めていただきたいです。認証に関しても、昨日もしかしたら、少しお話があったかもしれないんですけれども、全国レベルで進めている我々の認証との接続もまたご相談できればというふうに考えています。
それから、それはぜひここにあることをやってくださいなんすけど、ここに書いてないことで、来年の全国フォーラムが、大阪でありますけれども、その全国フォーラム自体のなんていうか継続性、を少し意識していただいた方がいいんじゃないかなというふうな気がしました。
なので大阪に引き継ぐときにですね、ぜひ、この沖縄の取り組みも、大阪でも少しこう、ある程度時間を取って触れていただく、こういうふうに展開していきますよっていうのを、やることをちょっと入れ込んでいただければというふうに思ってます。以上です。

（玉城座長）
はい、ぜひ生かしていただければと思います。あと、一言いいますと、市町村への声掛けが、なかなか難しいと思うんですけども、参画促進ですとか、普及啓発ですとか、例えば大学コンソーシアムの他の授業のときに、こども未来部の方が市町村に声かけて、４，５市町村の方々が、大学生のアクションプランを見に来てたんですね。
そんで、こういう SDGs の発表会のときに、市町村を巻き込んで、そこでマッチングをするとかっていうのも、ぜひ、こういった機会に、市町村に見える化していただいて、やはりその学生が活動する場所自体が基礎自治体だと思うので、そこをぜひ、あらゆる場所に声掛けはしていただけると良いのではないかなと思いました。
それでは皆様、もっと言いたいことがあると思いますけれども、定刻になりましたので、事務局にこれでお返ししたいと思います。
皆様、議事進行に向けてご協力ありがとうございました。

（事務局）
委員の皆様活発なご意見、ご議論をいただきありがとうございました。
本日の会議につきましては事務局にて議事概要をまとめまして、委員の皆様にご確認いただいた後、会議資料とともに県ホームページに掲載いたします。
以上をもちまして、令和 6 年度第 1 回 SDGs アドバイザリーボード会議を終了いたします。
本日はありがとうございました。